紀伊民報

2007年(平成19年)10月2日 火曜日　第19481号　(8)

水族館へ行こう！ 京都大学白浜水族館

14

オオナガレカンザシ

太田 満

ヤクシマダカラに襲われる

棲管で暮らすオオナガレカンザシ（水槽番号204）

オオナガレカンザシは熱帯性のカンザシゴカイ科の一種。石灰質を分泌して作った棲管（せいかん）の中で暮らしている。棲管は長さ十数ｾﾝあり、ヘビのようにうねって岩のすき間やイシサンゴに固着している。管の口からは、らせん状に巻いた一対の美しい房状の鰓冠（さいかん）を広げているので海中でもよく目立つ。この鰓冠は、呼吸器官としても、プランクトンを捕獲する摂食器官としても機能している。白浜水族館では常時、このオオナガレカンザシをゴカイの仲間を集めた水槽で飼育展示している。

数年前、この水槽の壁面や石組みなどで増殖する厄介者のチギレイソギンチャクを駆除しようとタカラガイの仲間、ヤクシマダカラ数個体を入れたことがあった。ヤクシマダカラは、南紀沿岸の岩礁地帯でもよく見られる大型のタカラガイで、もっぱら夜行性である。

ある日、ヤクシマダカラがオオナガレカンザシの棲管をはい登って、管の口に覆いかぶさっているのを発見した。急いで引きはがしてみると、ヤクシマダカラは吻（ふん）をゾウの鼻のように伸ばしてオオナガレカンザシ本体をほとんど食べ尽くしたところだった。

当時、オオナガレカンザシが相次いで死亡したが、それはヤクシマダカラを入れた直後に起こっていた。今回たまたま日中の出来事で発見できたが、これまでまったく気付かなかったのは、夜間に食害していたからだ。

オオナガレカンザシの棲管は硬い石灰質なので、口を閉ざすことができず、ふたもないため、吻の長い捕食者に襲われると容易に食べられる。

ヤクシマダカラの意外な食性に驚きつつ、イソギンチャク駆除については他の動物にやってもらうことにして、この水槽からはすべて取り出した。

外敵がいなくなったこの水槽では、オオナガレカンザシは順調に育ち、いつも鰓冠を広げて来館者を楽しませている。

（京都大学技術専門職員）